

「巨岩遺跡に息づく祭祀」

増山雄三

古事記や日本書紀の神話にでてくる、「天
岩戸（あめのいわと）」は、岩でできた洞窟
の事で、太陽神である「天照大御神」がそこ
に隠れ、世界が闇に包まれたという、「岩戸
隠れ」伝説の舞台だが、日本書紀の神代編に
でてくる話の粗筋はこうである。

「素戔嗚尊（スサノウノミコト）は、機織
りの神聖な御殿に馬を投げ入れ天照大神の身
を傷つけるなど、その行為は乱暴を極めた。

立腹した天照大神は天石窟に入り、磐一岩
（戸を閉じて籠ると、国中が闇に包まれた。

そこで、八十萬神（やおよろず）たちが、
天安河の河原に集まり策を考えて、磐戸の前
で、滑稽な所作を含む祭祀を行うと、天照大
神が不思議そうに外を伺う隙に、手力雄神が
天石窟から手を取って引きだした。素戔嗚尊

は罪を問われ、髪を抜かれて手足の爪を剥がれ、追放された」というものである。
かねてより、素戔嗚尊は粗暴だったために父母から追放され、暇乞いのため、高天原に住む姉の天照大神を訪ねたが、国を奪う邪心があるかと警戒されたので、素戔嗚尊は潔白を示す儀式「誓約（うけい）」を申し出た。
それは、それぞれが子を生み、男だったら勝ちとの取り決めで、素戔嗚尊が勾玉を噛み砕いて男神を作り出したと、日本書紀にはあるが、素戔嗚尊の乱暴狼藉の背景には、実は天照大神との対立があったのだ。
天照大神を岩戸から呼び戻す神話では、多くの神々が活躍するが、それらの神々は日本書紀によると、大和朝廷の氏族たちの遠祖と位置づけられ、鎮魂祭で舞楽に奉仕する女性を献上する氏族である、猿女君氏の遠祖に加え、朝廷の祭祀の実務を担当した、中臣氏と忌部氏の遠祖も登場するというのは、天岩戸の神話は、奈良時代の朝廷が執り行った政の

中心を担った、氏族たちの由来を説明する意味もあつたからだ。

この神話の中には、三種の神器を構成する鏡や璽（勾玉）が登場するなど、「天岩戸神話」は日本書紀の中でも重視され、宮崎県高千穂町の「天岩戸神社」を代表とし、天照大神が隠れた伝承を持つ洞窟や岩をご神体として、「ここが天岩戸である」として崇める神社は、西日本を中心に十六以上もあり、その主なものは次の通りである。

・滋賀県米原市弥高		平野神社
・京都府福知山市大江町		岩戸神社
・滋賀県高島市		白髯神社
・奈良県橿原市		天岩戸神社
・三重県伊勢市二見町		二見輿玉神社
・兵庫県洲本市先山		岩戸神社
・岡山県真庭市蒜山		茅部神社
・徳島県美馬郡つるぎ町		天の岩戸神社
・山口県山口市秋穂		玉租命の神社
・沖縄県島尻郡中屋村		クマヤ洞窟

岩とこれらの遺物から想起されるのは、神が籠る岩戸の前で、玉や鏡に矛を用意し祭祀を行った、「天岩戸」神話の世界観だ。

日本書紀には、「上の枝には多くの玉を紐に通した装飾品を懸け、中の枝には大きな鏡を懸け、皆一緒に御祈禱申し上げた。猿女君の遠祖である天鈿女命（アメノウズメノミコト）は、手に茅萱を巻いた矛を持ち、天石窟戸の前に立って、滑稽なしぐさの踊りで神意をうかがった」と記されている。

ところで、先の天白磐座は天岩戸など神話の伝承地ではないが、これら巨岩祭祀と似通った様子が、神話に描かれたというその謎を解く鍵は、大和王権が全国に支配を広げていったという、当時の時代背景にあったのだ。

埼玉県行田市にあった「埼玉古墳群」で出土した、四七一年製の鉄剣の金象嵌銘には、「治天下」とか「大王」などの文字が見られるが、それは、神道考古学が専門の笹尾国学院大学教授によれば、五世紀は、朝鮮半島の

動乱を受け、大和王権の国家領域の意識が形成された時代だったからだという。

一方、国家祭祀の場だった、福岡県宗像市にある世界遺産の「沖ノ島巨岩遺跡」では、豊富な遺物から、四世紀以降の祭祀の流れをたどる事ができる。

四世紀後半の祭祀遺物は、銅鏡が中心であるが、五世紀以降は鉄製品が増加していて、それは、この時期に大陸から大量の鉄が流入した証で、最新素材を用いた祭祀用具は、王権拡大とともに各地に普及し、浜松市にある天白磐座の地にも、それが伝わったようだ。そして、天白磐座遺跡の巨岩が位置する丘は、三方が川に囲まれ瀬音が清々しいが、発掘を指揮した元同志社大学教授の辰巳和弘さんは、「地域に恵みをもたらす水の豊かさに加え、堅牢な物の象徴として古来、聖性を見出された巨岩の存在が、『水の神』の座主场として祭祀の場選ばれた」という。

この地の首長は、聖地を清浄に保つため、

一度使用した祭祀具を、別の場所に廃棄してしまつたので、この地における遺物の出土数は少ないが、一方、沖ノ島の巨岩遺跡では鉄製の武器の外に、農耕具など多彩かつ大量の遺物が残されている。

笹尾教授によると、これらは日本書紀に記述が見られる、七世紀以降の祭祀で用いられた、神への供献品と共通しており、五世紀代の古墳時代における祭祀が、奈良や平安期の祭祀にも影響し、それが「天岩戸神話」に繋がっているのだと解説する。

大陸への航海安全を願つた、国家祭祀の場だつた沖ノ島と、地域の首長が地元の安寧を願つた天白磐座は、それぞれの規模は異なるが、巨岩のある両地には、日本書紀の記述に引き継がれた、祭祀の源流が息づいている。

天白磐座遺跡は、JR浜松駅から遠鉄バスに乗り約一時間、北神停留所で下車し、南西約三百米にある「渭伊神社」内にある。

令和二年八月